様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月 １０ 日現在

機関番号：１４４０１
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2010～2013
課題番号：２２５２０３９８

研究課題名（和文）日本語と中国語の名詞句周縁部に関する統語研究

研究課題名（英文）Syntactic Investigation of the Nominal Periphery in Japanese and Chinese

研究代表者
越智　正男（OCHI, MASAO）

大阪大学・言語文化研究科（研究院）・准教授

研究者番号：５０３２４８３５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,600,000円、（間接経費）　　780,000円

研究成果の概要（和文）：近年の理論言語学においては、述部の名詞項（主語や目的語）の統語構造が普遍的であるか否かが重要な問いの一つになっている。本研究は類別詞言語である日本語と中国語の名詞句周縁部の統語構造の解明を通してこの問題の理論的進展に寄与することを目指したものである。本研究の成果によれば、類別詞言語においても名詞句領域の上部に機能範疇の領域が（随意的に）存在することになる。従って「決定詞句 vs. 裸名詞句のパラメータ」仮説はその最も強い形では保持されえないという結論に至った。

研究成果の概要（英文）：It has been debated in the field of theoretical linguistics (most notably in generative grammar) whether nominal arguments have similar or distinct syntactic realizations cross-linguistically. This study aimed to contribute to this important issue through the investigation of the left/right periphery of the nominal argument in classifier languages such as Japanese and Chinese. As a result of the investigation, we came to the conclusion that nominal arguments in those classifier languages do project (optional) functional structures on top of the lexical domain (i.e., NP). This in turn led us to the view that the so-called Nominal Mapping Parameter cannot be maintained in its strongest form.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・言語学

キーワード：比較統語論　名詞句　類別詞　数量詞遊離　複数形態素

１．研究開始当初の背景

名詞表現の統語と意味に関しては多くの先行研究があるが、最近は個別言語の名詞句に関する研究に加えて比較対照研究の数も増加している。そのような中で近年注目を集める研究主題の一つに「決定詞(DP)言語 vs.裸名詞句(bare NP)言語のパラメータ」仮説がある。Chierchia (1998 *NLS*)等によって提唱されているこの仮説によれば、項(argument)の統語範疇は普遍的ではなくパラメータ化されており、例えば、イタリア語では決定詞句が項の役割を担っているのに対して日本語や中国語では裸名詞句が項となっている。この仮説には意味論的見地からの研究に加えて、最近では統語的見地からの一連の研究(Bošković 2008 *NELS37* 等)も加わっている。本研究の研究代表者は本研究の構想段階時にハーバード大学イェンチン研究所において総合型言語 vs.分析的言語の分類に基づくマクロ・パラメータ理論構築のための共同研究プロジェクトに参加しており、この研究の一環として上述のパラメータ仮説の妥当性の検証に着手することとなった。

２．研究の目的

本研究の主目的は上述の「決定詞言語 vs.裸名詞句言語のパラメータ」仮説を批判的に検証することである。この仮説によれば中国語や日本語の項(argument)は常に裸名詞句(bare NP)として具現化されるはずであるが、両言語の統語現象には名詞領域の機能範疇の存在を示すものが数多くあるからである。代表的なものに N'削除現象(Saito, Murasugi, and Lin 2008 *JEAL*)、属格主語の認可(Miyagawa 1993 MITWPL, Ochi 2001 *JEAL*)、中国語の複数形(Li 1999: JEAL)や類別詞(Cheng and Sybesma 1999: *LI*)などがある。

３．研究の方法

(1)類別詞の統語構造

日本語と中国語の名詞句周縁部の統語構造の解明のため、まず類別詞の統語構造の解明を初期段階の主要目標として設定した。具体的には C.-T. James Huang 氏（ハーバード大学）との共同研究の形で日本語と中国語の類別詞構造について研究を行った。その際、両言語の共通点に加えて相違点にも着目し、それらについて理論的に妥当な説明の構築を試みた。この初期段階での研究成果に基づき、以下の二点についても研究を拡張させることとした。

(2)類別詞と複数形態素の共起関係に関する日中比較研究

上述の「決定詞(DP)言語 vs.裸名詞句(bare NP)言語のパラメータ」仮説の検証のためには日本語や中国語などの類別詞言語における複数形態素の分析が不可欠であるため、先行研究での知見を土台にして日本語と中国語の複数形態素の統語分析についての初期仮説の構築を目指した。

(3)類別詞表現の遊離現象の統語分析

量化表現の遊離については数多くの先行研究がある。ここで着目すべきは、英語を含め多くの言語においては遊離する量化子が全称量化子（あるいは exhaustive な量化子)に限定されるのに対して、日本語、韓国語、タイ語などの類別詞言語では全称量化子に加えて「数詞＋類別詞」も遊離現象を認可するという点である。これらの遊離型量化子に関しては、統語的な遊離（分割）に基づく「移動分析」と副詞的表現としての「基底生成分析」の二つの考え方が提案されてきた。本研究は日本語及び中国語の名詞句周縁部の分析を通して当該の遊離現象の存在（日本語）及びその欠如（中国語）についての理論的解明を試みた。

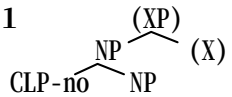
４．研究成果

(1) 類別詞表現の統語構造

C.-T. James Huang 氏（ハーバード大学）との共同研究の概要を示す。まず、類別詞が二つの異なる統語的形態で派生に導入される可能性があり、言語間でどちらの構造が採用されるかが異なるという趣旨の提案をまとめた。一つ目の形態は類別詞主要部が名詞句を補部として選択する場合であり、二つ目は類別詞句が付加詞として名詞句内に導入される場合である。この仮説に基づき、中国語が前者（主要部としての派生）のみを許容するのに対して日本語の場合はいずれの導入方法も認可するという仮説を構築した。また日本語も中国語も（音形を伴わない）機能範疇を名詞句の上部に（随意的に）投射し、この機能範疇が名詞句の特定性(specificity)に影響を与えている旨の仮説を提案した。以下にその内容を紹介する。

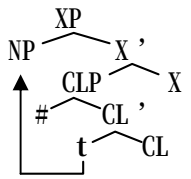
日本語では類別詞は常に数詞(numeral)と共に現れるが、類別詞（＋数詞）の分布は以下の３つに大別される。(a)前置型（例：三冊の本)、(b)後置型（例：本三冊)、(c)遊離型（例：本を昨日三冊買った)。これに対して、中国語では前置型のみである。まず、日本語の前置型類別詞は付加詞として名詞句内に導入された統語構造を持つ。

図１



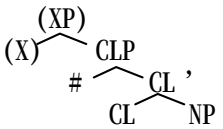
後置型類別詞はその主要部が名詞句を補語として選択している構造を持つ（Watanabe (2006: NLLT)も参照されたい)。

図２



さらに、本研究では日本語の後置型類別詞と中国語の類別詞の統語構造が同一の基底構造を持つとの仮説を提案しており、中国語の類別詞を含む名詞句の構造は以下のようになる。

図 3



日本語の前置型（図１）と後置型（図２）の統語構造の比較から明白であるように、この仮説によれば、前置型では類別詞が名詞句内部に付加詞として導入されており、名詞句全体も（裸）名詞句として具現化される可能性を有するのに対して、後置型の方は名詞句の上に類別詞の投射(Classifier Phrase)が常に存在する。さらに後者の統語構造には類別詞の投射に加えてさらにもう一つ別の機能範疇の投射があることになる（図２の X の投射）。この機能範疇の性質については未解明な部分も多いが、研究の結果、この投射の有無が名詞句の解釈（特に特定性）に関与している旨の仮説を構築するにに至った。これは前置型類別詞が特定性(specificity)に関して曖昧であるのに対して後置型類別詞は「特定的読み(specific reading)」が非常に強いという観察に基づいている。特定性の有無が名詞句の統語構造の大きさ（投射の数の多さ）と関連しているという一部の先行研究（特に Muromatsu 1998: メリーランド大学博士論文)の提案を踏まえて、本研究では「特定的読み」の名詞句は「非特定的読み」の名詞句よりも大きな（つまり投射の数が多い）構造になっているという仮説を提案した。後置型類別詞（図２）の方が前置型類別詞（図１）よりも投射の数が多いために前者では「非特定的読み」が排除されると考えるのである。またこの仮説は中国語の事実からも支持される。Huang (1987)が指摘しているように、「類別詞＋名詞」（例：「个学生」）が不定名詞として解釈される場合に「非特定的読み」しか許さないのに対して、「数詞＋類別詞＋名詞」（例：「一个学生」）は「特定的読み」も許すのである。この事実は（図３を若干修正して）数詞が別の投射を形成すると仮定することで捉えられる。

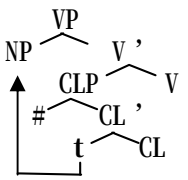
(2) 類別詞と複数形態素の共起関係についての日中比較研究

次に日本語と中国語の複数形態素の分析についての研究成果を簡潔に述べる。Kurafuji (1994)で指摘されているように、中国語の「們」と日本語の「達」との間には意味的な性質や制約に関する共通点が非常に多い（ただし Nakanishi and Tomioka (2004: JEAL)も参照のこと）。しかし先行研究（Iljic (1994)や Li (1999))で指摘されてきたように、中国語では類別詞と複数を表す「們」のような要素は同じ名詞句内に共起できない（例：*五个学生們）のに対して、日本語ではこのような共起に関する制約は見られない（例：五人の学生達/学生達五人）。この相違点に対して本研究は統語的な説明を試みた。まず、中国語で類別詞と「們」の共起が不可能である事実に対して Li (1999)の提案を援用し、「們」はそれが修飾する名詞主要部（例：「学生」）の接尾辞として派生に導入されるが、「們」の持つ定性(definiteness)の素性の照合のために名詞句上部の機能範疇（決定詞）へ（名詞主要部と共に）主要部移動する必要があると仮定する。そして Li (1999)が提案するように、類別詞主要部が名詞主要部と決定詞主要部との間に介在する場合には「名詞主要部＋們」の主要部移動が阻止されると仮定する。その上で、同様の制約が日本語において観察されない点に関しての理論的説明を試みた。まず、前置型類別詞（「五人の学生達」）の場合、類別詞は名詞句に付加詞として併合されているため、名詞主要部が（不可視的に）主要部移動する際の介在要素とはならない。また、本研究では後置型類別詞（図２）が中国語の類別詞（図３）と同じ基底構造を持つと仮定しているが、後者と異なり前者は「達」と共起する。これは図２に提示されている名詞句の可視的移動によって可能になっているという趣旨の提案をした。「達」が接辞した名詞主要部はその最大投射(NP)が可視的に X の指定部まで移動しているために、類別詞主要部が介在要素にならないのである。

（３）類別詞表現の遊離現象について

類別詞の遊離に関しては以下の仮説を提案するに至った。まず、日本語における遊離型の類別詞表現が（前置型類別詞からではなく）後置型類別詞の構造からの統語的遊離（分割）によって派生されるという仮説を立てた。これは Peter Jenks 氏のハーバード大学博士論文にある「類別詞言語において類別詞表現の遊離を認可するのは後置型類別詞を持つ言語に限られる」という一般化とも合致する。この仮説によれば、遊離型の類別詞は以下のように類別詞の後置型より派生される（以下は遊離類別詞が動詞句に付加した場合の構造である）。

図 4



この分析の詳細は以下の通りである。遊離型の類別詞（図 4）と後置型類別詞（図２）は（ほぼ）同一の基底構造を持っており、どちらの場合も類別詞主要部の補語(complement)として基底生成された名詞句(NP)が顕在的に移動するが、その着地点が二つの場合で異なるという提案である。この違いは名詞句の周縁部に XP が投射されるか否かという点と

密接に関係しており、XP が投射される場合（後置型類別詞）はその指定部が移動の着地点となりえるので、NP は XP の指定部へ着地し、結果として NP は名詞句領域内に留まる。これに対して XP が投射されない場合(遊離型類別詞）は、名詞句領域内に NP の移動の着地点が存在しないために、NP は名詞句領域外へ移動する。この提案によれば、後置型類別詞構文において XP の投射は随意的ということになるが、これは日本語の前置型類別詞（図１）や中国語の場合（図３）において XP が随意的であるという点と合致する。さらに、この提案は、後置型類別詞と遊離型類別詞が特定性の解釈において異なるという事実(Downing 1994: John Benjamins)にも説明を与えうる。さらに、上述の仮説は中国語に類別詞表現の遊離が見られないという事実にも説明を与えうる。日本語の後置型類別詞の場合（図２）とは異なり、中国語の類別詞構文（図３）では名詞句(NP)が顕在的に名詞句領域内で移動しない。従って名詞句領域外に移動することもないと考えられるからである。これら一連の仮説の検証のために、本研究ではこれまであまり着目されてこなかったタイプの遊離型類別詞構文に着目した。これは全称量子と類別詞が共に遊離する現象である（例：太郎は本を昨日三冊すべて読んだ)。この現象については Kawashima (1998 JEAL)等の先行研究があるが、類似した現象がイタリア語やオランダ語でも観察される(Cirillo 2010: Linguistics)。Cirillo が「全称数詞量化子(Universal Numeric Quantifier)」と呼ぶこの構文に関して本研究は日本語に関する綿密なデータ収集とその分析を行った。その結果、この構文が後置型の「類別詞＋全称量化子」を持つ構造（例：「本三冊すべて」）から統語的操作によって遊離（分割）されたことを示すデータを発見した。このデータは遊離量化子の「基底生成分析」によっては捉えられないと思われるという点で特筆に値すると考える。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　5 件）

① C.-T. James Huang and Masao Ochi. Remarks on Classifiers and Nominal Structure in East Asian” (査読あり), Peaches and Plums, ed. by C.-T. James Huang and Feng-Hsi Liu, Academia Sinica, Taipei, 2014, pp. 53-74.

② Masao Ochi. “Universal Numeric Quantifiers in Japanese” (査読あり), Iberia: An International Journal of Theoretical Linguistics 4.2, 2012, pp. 40-77.

③ Masao Ochi. “Numeral Classifiers, Plural/ Collective Elements, and Nominal Ellipsis” (査読なし), Nanzan Linguistics 8, 2012, pp. 89–108.

④ Masao Ochi. “Remarks on Universal Numeric Quantifiers in Japanese” (査読なし),『言語文化共同プロジェクト 2011 自然言語への理論的アプローチ』, 2012, pp. 21-30.

⑤ Masao Ochi. “Some Asymmetries in Adnominal Quantification in Japanese” (査読なし), 『言語文化共同プロジェクト 2010 自然言語への理論的アプローチ』, 2011, pp. 31-40.

〔学会発表〕（計　４件）

① Masao Ochi. “Classifiers and Plural/ Collective Elements in the Nominal Domain,” 日本言語学会第143回大会ワークショップ発表, 2011 年 11 月 27 日, 大阪大学.

② Masao Ochi. “Numeral Classifier and Extended Nominal Projections” (招待研究発表), 日本英語学会第 28 回年次大会, 2010 年 11 月 14 日, 日本大学.

③ C.-T. James Huang and Masao Ochi. “Classifiers and Nominal Structure: A Parametric Approach and Its Consequences,” Glow-in-Asia VIII, 2010 年 8 月 13 日, Beijing Language and Culture University.

④ C.-T. James Huang and Masao Ochi. “Remarks on Classifiers and Nominal Structure in East Asian,” International Association of Chinese Linguistics 18, 2010 年 5 月 21 日, Harvard University.

〔図書〕（計　０件）

〔産業財産権〕
○出願状況（計　０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
越智正男（OCHI Masao）
大阪大学・言語文化研究科・准教授
研究者番号：50324835

(2)研究分担者

(　　)

研究者番号：

(3)連携研究者

(　　)

研究者番号：